

「視点」の差を埋めるために 刺激になる「委員長・リーダー会議」

広報調査委員会委員長 福山裕治



初春のお慶び申し上げます。
今年もよろしくお願ひ申し上げます。

昨年を振り返ると、12月に「委員長・リーダー会議」が第2回目を終えました。

きっかけは、6月の第25回通常総会で内藤裕人遊技機委員長と初めてお会いして名刺交換をしたことでした。委員会でも月に1回は本部に来るのに委員長同士が集まる機会がないことに疑問がありました。が、他の委員会でも情報交換の場がないという声が上がっている



福山委員長を挟んで、内藤裕人遊技機委員会委員長(左)と安藤博文依存問題PTリーダー

ことで開催の運びになりました。

第1回の会議は7月に実施され、6か月に1回のペースで進めています。会長、委員長、PT(プロジェクトチーム)、活性化委員会、事務局がそれぞれの立場で意見を出し合うことで新たな発想が生まれる。何よりつながりを感じています。

日遊協は依存症(のめり込み)問題WG(ワーキンググループ)に安藤博文リーダーを就任させ、全日遊連、日工組、日電協、全商協、回胴遊商の関係6団体の協議を進めています。初めての役回りですが、藤リーダーの苦勞が窺えますが、問題対応ガイドライン作りに注力しています。

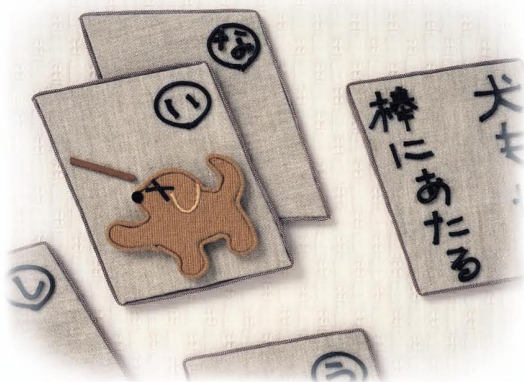
広報調査委員会が今年度に取り組む課題は、パチンコ業界情報の

発信です。つまり、内外を問わずパチンコ業界を理解するための知りたいことをまとめる。共通の認識を持つて説明できる業界ガイドブックの作成です。

人材育成委員会で実施している第8回遊技産業マネジメント・カレッジで金賞の発表は、若者の参加を促す業界のイメージ転換の一環としてパチンコの名称を「J P」に変更することを提案しまし

た。その時、パチンコが「大衆娯楽」という代名詞のように語られるのが、若者には理解しにくいと広報調査委員会メンバーから声が上がったことを思い出しました。「日本の娯楽」として「JP」がイメージアップ戦略として語られるには、発信方法が必要だと思えます。

先日、ある会場で日本に来て1年になるインドネシアの留学生と



話す機会があり、職業を聞かれたので「JP」(ジャパン・パチンコ)だと説明すると「知ってる」という意外な答えが返ってきました。彼は、お店の外観に興味があり、一度遊技してみたいと話してくれました。「日本人」が日本の文化を「外国人」によって再認識させられるように、パチンコ業界のイメージは業界に携わる人たちの認識を改め、正確に知ることから始めなければならぬと感じています。業界にいる我々の視点と一般の人たちの視点の差を埋めるために何が必要でしょうか。「論より証拠」事実を証明して伝えることが、業界の懐疑を説明できる手段であり、なにより当事者意識を持つことのように思えます。

第3回委員長・リーダー会議開催時には、業界の明るい未来が想像できるように意見交換していきます。